

芝の 思い出

有梅書



三七芝会

目 次

ご挨拶

- 前代表幹事当時の経過とご挨拶 中島直忠 2
三七芝会“思い出綴り”出版に当って 会長 鈴木博視 4

思い出

- 昭和16年、芝中の思い出 平林 眞 5
私の芝中時代の思い出 鈴木博視 7
写真の思い出 森藤静夫 8
芝中時代の思い出 高梨頼幸 10

先生の思い出

- 数学の先生と英会話の先生 前澤宮内 12
思い出の諸先生のイメージ 山口敦二 16
先生の思い出 末次 誠 18

戦時中の思い出

- 海軍の思い出 塩谷貞次郎（旧姓 中垣） 19
予科練 山口敦二 20
闇夜の箱根越え 荒井謙治 24
三七芝会のことども 川合又二 25

交友

- 友を思う 土屋敏郎（書号 有梅） 26
生きてる友と亡くなった友へ 佐藤定幸 27

思う

- 詩 堀内 昇 28
ああ満州 石井 宏 29

覚えてますか？ 鈴木博視

- ご遺族より 瀧本初枝 31
ご家族より 石井園子 32
家族の手紙 田村 純（妻 明子） 33

思い出アルバム

- 卒業アルバムの諸先生 34
三七芝会会長 36
三七芝会 37
三七芝会スナップ 39
幹事会スナップ 41
学窓 42
課外 44
芝中時代 46

お知らせ

- メンバー短信 49
三七芝会協力諸兄紹介 50
物故者名簿 51
アルバム 52
芝学園同窓会事務局の太田さん紹介 54
編集後記 55

前代表幹事当時の経過とご挨拶

中島直忠

われわれ昭和18年3月の第37回芝中学校卒業生は、いつの頃からか、小林義栄君の発案で「三七芝会」と称することとなった。多くの会員が社会人として生活が安定した昭和40年代から、小林君が中心にお世話をしてきて、年1回の総会その他親睦の催しを適宜行っていたようである。小生は昭和30年代から40年代半ばまでは仙台や福岡に住んでいたため、これらの会合に参加できなかった。



近影

その後東京に戻ってから時々参加していた。平成5/6年の頃、芝中学校・高等学校の校長を拝命して、同窓会との関係が緊密になり、三七芝会にもより親しく参加するようになった。

ところが、平成10年の頃、小林君が思いもかけず突然急逝されて、三七芝会も3年間ほどの間、休業状態になった。矢吹輝男君がこれを嘆いて、小生に活動再開の音頭取りを要請してこられた。その熱意に動かされて、以前小林君とともに熱心に幹事活動をされていた滝本秀明君・末次誠君・池谷一君・伊東康雄君・矢吹君などと相談しながら、平成13年の秋から年1回の総会や旅行会を開催したり、その準備の幹事会を適宜行うようになった。

ご挨拶

総会会場として当初は東京プリンスホテル 11 階の「ピオニー」を数回使った。ここは母校校舎がすぐ足下に見える好位置なので、矢吹君推奨の会場であった。旅行会は、平出光君の懇篤なお世話により熱海温泉や浜松市内観光を 1 泊 2 日で行った。また平成 16 年 5 月には南九州を中心とする 2 泊 3 日のツアー旅行を行い、何れも好評であった。

幹事としては、上記の諸君のほか、川合又二君・前沢宮内君・鈴木博視君・田村純君・土屋敏郎君・長野達君・山本茂男君・本村鉄郎君・永島泰治君・柴田博彦君などに順次お願いしたが、逝去された方も多し。会計幹事として片手の麻痺にも拘わらず長年ご苦勞戴いた末次君には感謝に堪えない。また、当初は矢吹君が法律事務所を、後には鈴木君が経営コンサルタント事務所を、三七芝会事務所としてご提供下さったことは、何より有り難いことであった。

平成 21 年 7 月に小生は胆嚢癌を手術して著しく体力が衰えたため、総会において代表幹事を辞した。代わって会長として鈴木君が選出され今日に至っている。ご苦勞様である。

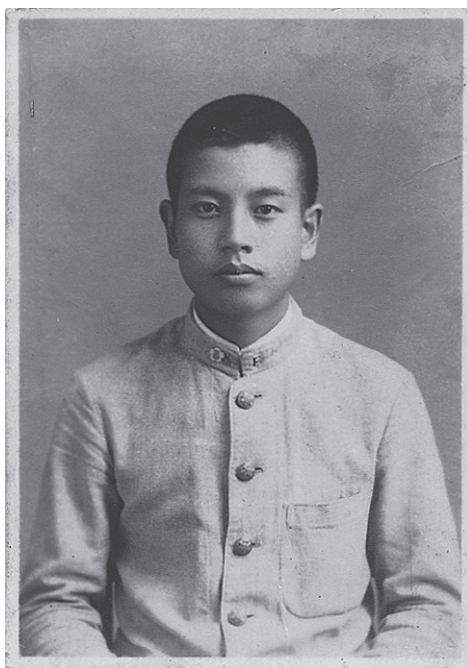
本会の会員も故人になられた方がかなりの数に達し、常時連絡が可能な会員は 60 名程度、そのうち総会に出席される方は、20 名程度に減ってきてしまった。殆どの方が 85 / 86 歳に達する長寿であるから、これもやむを得ないが、3 名の会員数になるまで、三七芝会を続けようではないかということが、小生の念願である。宜しく。

三七芝会 “思い出綴り” 出版に当って

会長 鈴木博視

平成21年前会長中島直忠君が“膀胱がん”の手術を受けられ(手術成功)養生の為会長辞任され、総会で小生が会長を引継ぎました。中島君は永く三七芝会代表幹事、会長として会の総まとめ役で活躍して戴き感謝致して居ります。既に千代田区一番町の私の事務所を10年前から三七会の事務局として提供し、幹事有志諸兄の諸々の打合せ場所として活用されて現在に至って居ります。さて我々も満85～86才となり体は万身創

痕、医者通いは当命に生きて来て“今居ります。有難い事命をもっと大切に頑張らうではない気である内に何かびく若かりし頃の思い出を出版して後の仕事として諸多数の方の賛同が思い出話しの文章



2年生当時

ました。感謝しています。

現在編集に経験のある山口敦二君と共に、苦勞を重ね乍ら資料をまとめ、出版の運びに至った次第です。本書は芝中同窓会事務局にも記念として残ります。諸兄もこの思い出綴りを時々見て若返って戴きたいと思ひます。又この出版印刷に芝中後輩、富士印刷(株)社長吉野氏の協力がありました。有難う。芝中・芝高は何とすばらしい学校だろうと改めて芝中に感謝したい。

り前、而し一生懸日”をむかえて居です。与えられたし、天寿に至る迄か。私は何とか元心に“じーん”とひ芝中時代の数々の残したいと私の最兄にお願いした処、あり貴重な写真とが多数送られて来

昭和 16 年、芝中の思い出

平 林 眞

芝中に在学した昭和 13 年 4 月～17 年 3 月は、日本が支那事変から大東亜戦争へと突き進んだ 4 年間であった。青山通り表参道から須田町行で青山一丁目、乗換えて六本木経由神谷町下車という市電通学のルートには、1、2 年生の頃は、まだ、のんびりしたムードが漂っていた。

この原稿を書き出して、昔の写真などを探している内に、こげ茶色のカバーの「昭和 16 年度芝中学校生徒通信簿」を見つけた。学校と保証人との間の連絡通信のためのノートで、教育勅語、校訓「遵法自治」（脇にインクで剛毅敬虔の記入あり）から始まり、軍国主義的匂いの濃い生徒心得 14 条があり、上下に保証人と担任の確認印がある通信欄が続いている。記入してある連絡事項は消えかかって読みにくいが、ひとつ一つは昭和 16 年の芝中生活を思い出させて呉れた。いくつかを拾い出してみよう。

最初の欄には、「4 月 8 日 祖師降誕 釈尊降誕会を祝し午後臨休」とある。灌仏会で半ドンだった。担任の坪井先生を中心に並んだ 4 年 E 組の集合写真（添付）は、多分この頃撮ったものであろう。教練服にゲートル姿での集合写真は、3 年生までにはなかった。

「4 月 23 日 全校行軍；午前 8 時 市電下板橋終点集合、目的地；赤羽より西新井方面、解散；田端駅、水筒弁当携行、ゲートル着用」 荒川と隅田川を越えた 12～13km の道程かと思われる。

「6 月 16 日 中華民國主席汪精衛氏来朝歓迎のため午前 7 時登校、制服制帽」 街頭に整列し国旗を振ったのであろう。

「9 月 15 - 18 日 習志野陸軍兵舎 2 泊 3 日の野営」 2 学期に入ると次第に戦時色が強くなった。しかし直前に都合で延期。

「10 月 14 日 勤労作業 陸軍兵器補給廠 十条駅午前 7 時集合 午後 4 時解散」 何をしたのか、記憶がない。

「11 月 12 - 15 日 富士山麓野外教練」 滝が原演習場で 2 泊 3 日、バックに富士山をはめ込んだ集合写真（中央に配属将校ラッコとノガミ？）が残っている。

「12 月 8 日 宮城参拝午後 3 時 10 分下校」 早朝の大本営発表は今でもはっきり憶えている。

「昭和 17 年 1 月 27 日 習志野にて野外教練（発火演習）、京成上野駅山下口午前 8 時集合、午後 4 時解散」 日帰り、2 月 2 日も同様、延期された 9 月の埋め合わせと推測される。

「2 月 16 日 シンガポール陥落祝賀のため宮城奉拝、0 時半解散」 旗行列だったか？

おわりに、我々がお世話になった恩師の写真を添付します。礼服姿の木村桂巖校長、左右に加藤貞斎、松本徳明両先生が校庭に並んでおられる。裏書に昭和 15 年 11 月 10 日とあり、皇紀 2600 年祝典の日に撮影したものであろう。

写真①は 1 年生の夏休み、房総竹岡海岸での集合写真、裏には「東京湾要塞司令部検閲済 昭和 13 年 7 月 25 日」の印があります。こんな写真までも検閲していたとは！！中央に大村桂巖校長、その周りは水泳指導員と思われる人々が囲んでいます。生徒一人ひとりの顔は判別し難いけれど、戦前のシンボル 白ふんどしが懐かしい。

写真②は 4 年 E 組、2 学期軍事教練、富士山麓滝が原演習場、昭和 16 年 11 月 13 日。教練が終わった直後か、会員（配属教官以外）が楽しそうに笑っています。そうとう退色し黄ばんでいましたが、復元してみました。背景にはめ込んであった富士山は消え

思い出

てしまいました。

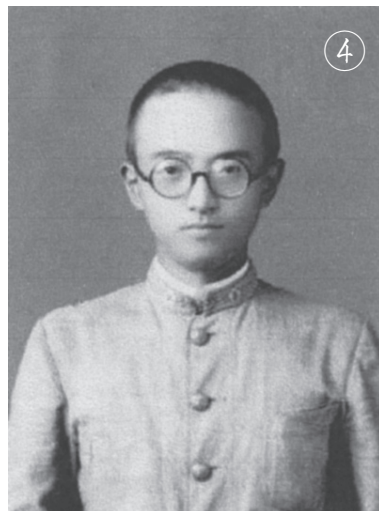
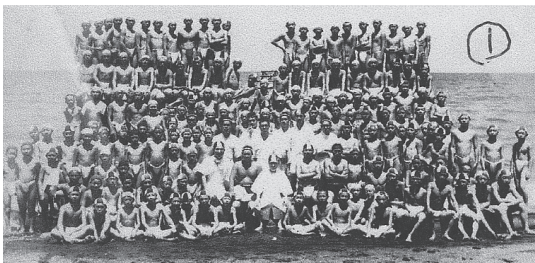
写真③は窪田忠善、竹葉秀世、佐藤照、鈴木博視君と平林の5人。裏書きに、久保山隆雄君撮影、昭和17年1月3日とあります。大東亜戦争開戦祝勝ムードのお正月でした。小野成人先生（英語）の所に伺った帰りだったと思いますが、6人揃って正月から何の話だったのか、憶えていません。試験準備にカツを入れられたのかも？

写真④は4年生の証明書用写真、70年前の私です。

写真を探している時に、古い手帳に挟まっていた1枚の紙切れを見つけました。昭和16年9月22日「体力章検定証」、裏には検定会会長大村桂巖、検定員加藤貞齋の印がある4年生2学期の体力検定の結果でした。総会判定は級外2、まことに恥ずかしい数字が並んでいます。特に、手榴弾投と運搬がひどい。徴兵検査（昭和19年）の結果が丙種であったのも頷けます。

100米疾走	: 16秒	14秒以内
2000米走	: 8分04秒	7分30秒以内
走巾跳	: 3米90糎	4米80以上
手榴弾投	: 25米	45米以上
運搬(50米)	: 30疋17秒	60疋15秒以内
懸垂	: 9回	12回以上

右側は体力章のレベルと思われる上級者の標準値で、体力章を受章された方にあらためて敬意を捧げます。一方、この体力で86才まで健康でいられるのは幸運と云うべきで、感謝・感謝……です。以上



私の芝中時代の思い出

鈴木博視

昭和13年4月入学から18年3月卒業までの5年間今でも忘れられない数多くの思い出を残してくれた有難い5年間であった。多くの友を知り、お互い助け合い喧嘩もし親友も出来た。戦時中であったため、軍事教練等が多くあったが授業は大体時間割り通り進行、苦しい時代であったが意外に平穩に過したと思う。私は住居が港区三田であったので歩いて通学した。三田通りから赤羽橋を渡って芝公園を突抜けるコースで大体強歩で25分で校門に入る。当時の芝公園は校歌の通り“松柏凋まぬ緑の中で”弁天様が祭られた池あり滝あり、大木に囲まれた小道が通路になって居り、夏は涼しく現在の公園とは比較にならない。正則中学の近くで“ジャンジャン”の鐘の音、後はかけ足で校内に飛び込む、浜松町方向からかけ込んだ友人とぼったり“ハアハア”と息をはづませて校庭に並びやれやれだ。

芝中にはユニークな先生が多く居られた。先輩が先生の“アダ名”をつけ、それが引継がれて続いて居るのだ。数学の“オバケ”堤先生いつも着物で下は靴で教台を活歩された姿忘れられない。幾何の沓掛先生、黒板に○を書き六角三角どうでもよいの掛け声でわかり易い説明で問題を解く。なる程と感心をし幾何に興味を持つ様になった。我々低学年の頃“低気圧”加藤先生が米国人スレーベン女史を紹介、英会話の授業が始まった。が、女史は殆んど日本語がわからず我々も英会話は勉強していない。当然スレーベン女史はヒステリーを起し教室内は騒然、そんな時加藤先生が飛んで来られ、女史から説明を聞き悠長な英会話で答えられた事があった。加藤先生の落ち着いた会話はすばらしく今でも忘れない。その他に地理の“ダイナマイト”山田先生、英語の吉田“ネコ”先生、歴史の“鮒”こと松橋先生、絵の“赤オニ”鈴木亜夫先生、教練の“イモ”山田先生、“ラツ子”梅田先生、配属将候“ネツ”野上中尉、軍事教練で我々相等に痛めつけられた思い出があるが、反面我慢強い人間勉強にもなったと思う。特に5年生時代は戦時中でもあり、習志野、富士裾野等3泊4日の教練あり、夜間行軍、夏の炎天下の100K行軍、冬の多摩川敵前渡河行軍等、相当に厳しい教練が多々あり、行動中体力的に弱くなった友人を助け合い、お互い励まし会って苦しい教練を乗切ったもんだ。友人同志の友情が生れ、助け合いの精神が強烈に心に刻み込まれた。受験勉強も大切であったが、私の芝中時代は良き先生方にめぐまれ、何でも話せる親友も出来、夫々の青春を送る事が出来たと思う。芝中に学んだ事と苦楽を共にした37回卒業の諸兄に心から感謝している。





写真の思い出

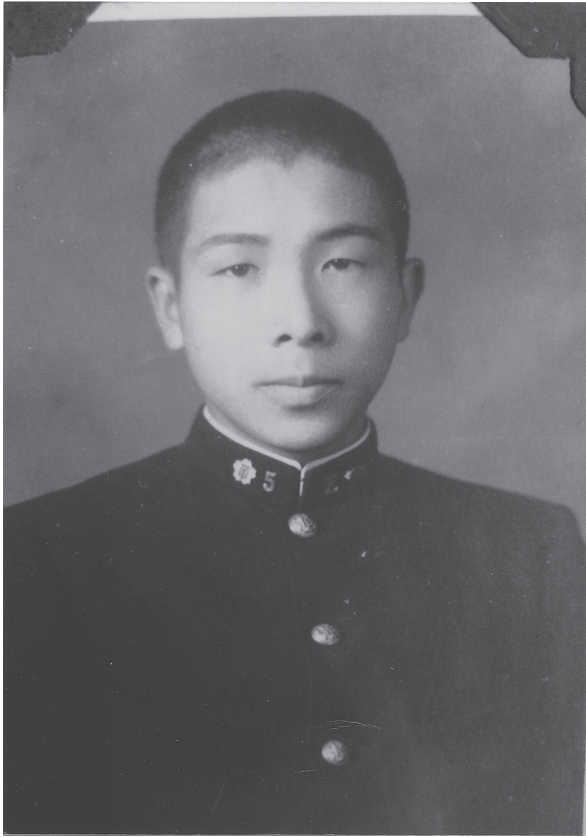
森 藤 静 夫

私は大森の山王で生まれ、小学低学年の頃から終戦時まで久ヶ原に住んでいましたが、当時、オヤジが東芝の営業部長と小向工場長を兼務しており、戦時中に東芝が通信機器等を製造していた所謂軍需工場だったとのことで、終戦時 G.H.Q によって幹部追放になり、偶々オヤジの郷里山口県に年寄りが生存していたため、その面倒をみるということで、20年11月に折角戦災を免れた家を処分し、一家揃って帰郷しました。そんなことで東京在住中には東京大空襲の貴重な体験もさせられました。

帰郷後何回かは思い出の地久ヶ原を訪ねてみましたがその都度環境が著しく変化しており、現在でも家は昔のままですが、家の向側に俳優「渡 哲也」の立派な家が建っており、全く昔の面影はなく幻滅の悲哀を感じております。

思い出の写真をお届けします。

私の秘蔵のアルバムに貼ってあった故人の思い出写真です。



(以下敬称略)

本村鉄郎、長野達、加藤哲朗、
長井宏造、小池匡三

諸君の写真で他に

海老原敏明、金子丈夫、高橋信
造、井上美彦、平井定四郎

諸君の集合写真もあったようで
す。

他に現在元気で活躍されてお
られる、下記諸君の写真も多数
ありますが、物故者なら甦ること
乍ら、最近では個人情報保護
法云々とか言って、色々なペナ
ルティーがありますので、御本
人の了承なしで提供するのも如

何なるものかと躊躇しております。

丸山充夫、金子義信、松本武、山口敦二、木村薫、佐藤頼道、田実瑞郎、
鴨井行雄、海老由紀男等

まだまだ丹念に調べてみれば、随分懐かしい、面白い思い出の写真もある
と思いますが、何しろアルバムに貼ってあるものを複写したものですので
見苦しい点はご容赦下さい。

加齢のためパソコン操作もままならず、止むを得ず手書きにしましたの
で乱筆のため、よろしくご判読の程を

末筆乍ら貴三七芝会の益々のご発展を心より祈念しております。

芝中時代の思い出

高梨 頼 幸



今放映中のNHKの朝ドラ「おひさま」は、中学時代と時が重なるので懐かしい気持ちで見ている。なにしろ七十年近い前の事なので、最近頃に老化が進んでいる私の頭脳では、その頃の事が断片的にしか思い出せないのも、時代が混同し、事実と違っているかも知れない。夏の今頃になると、毎年思い出すのは、学校が夏休みに入るとすぐ英数国漢の夏期講習があり、登校するとすぐ小使室に直行し、用意されている大きなヤカンに入っている冷えた麦茶で渴ききっている喉を潤おしたものである。その時の麦茶の味が今でも忘れられない。中学二年の夏、父の停年退職を期に両親が、郷里の山形県米沢に転居し、私は江戸川区に住む親戚の家の下宿する事になった。通学には、小松川より市電に乗って御成門まで行き徒歩で学校まで通学していた。其の頃の市電は、何処まで乗車しても片途七銭、往復が十四銭であったが、早朝六時半迄に乗ると、何銭だったかは失念したが、かなり大幅な往復割引運賃であったと思う。その割引運賃の電車に乗るべく冬などは、まだ暗い内に起きて乗車通学したものである。朝五時起き癖はその頃からずっと続いている。私の中学時代は、楽しかったと言う記憶は、あまり無いが、二三の思い出す事を記してみたいと思う。親元から離れ、特に監督する人も居ないので、勉強嫌いで、成績は、何時も下位の方であった。

数学（代数）の沓掛先生は、教え方が上手だったのであろう。それまで全く理解出来なかった二次・三次方程式の解き方が納得出来、また大塚先生による補助線を引く事により、幾何の難問を解く事に興味が沸き、数学

思い出

が好きになり、後日理系の学校を目指す切っ掛けとなった。また化学の川上先生には、新しい物質が化学反応によって作り出せる実験を交えた授業に興味を覚え、後日工業専門学校の応用化学科を専攻するもとなった。

私は、中学時代は、青白い顔をした痩せた体型をしており、その上、運動神経が鈍く、動作が緩慢であった故か、教練の U. S. N の先生方には、自分の勘繰りかも知れないが、他の生徒よりも多くの叱咤・罵声を受け、シゴカレタと思っている。そのお陰で私は、他人より若干忍耐・辛抱強い人間に成長したのではないかと思っている。また同級生の T 君には、今でも夢にまで見るような暴力によるイジメを受け、一時学校に行くのが恐ろしく、今で言う登校拒否になりかけた事があったが A 君等による励ましを受け幸い不登校にならないで済んだ覚えがある。その頃の事が後日ある程度、人より屈辱に耐えられる性格が備われたと今では懐かしく思っている。

私は、昨年三月退職するまで六十三年間、一兵卒として会社勤めをして来たが、それは、私が今まで入院する様な大病・大怪我をした事が無く、全く運が良かったからと思っている。その間「その他大勢」の一員として何時の年代でも脚光を浴びると言う事は無かったが、幸い舞台より転落せず、無事現役より退場出来た事は、幸せであったと思っている。その六十三年間、数回の通勤電車の遅延トラブルによる時以外は、一度も遅刻した事が無かったと言うのが、私のツマラヌ自己満足である。今まで多くの人たちの御支援・御厚意のお陰で、幸い現在は、悠々自適・日日是好日と言うには程遠いが、介護保険等のお世話にもならず、「さて今日は何をして一日を過ごそうか」と朝最初に考えるのが唯一の悩みであるという平穏な毎日を過している。そんな現在があるのも虚弱児であった私を、人並みに育ててくれた芝中学五年間の受けた教育のお陰であると思いき感謝しております。

芝中学 有難う

終り

数学の先生と英会話の先生

前澤宮内

数学が好きだったという人は少ないだろう。大方の人は数学が苦手だったはずである。僕も例外ではなく、数学は好きではなかった。しかし、数学と云うのは教えてくれる先生によって、好き嫌いが決まるということを知ったのも、芝中時代である。

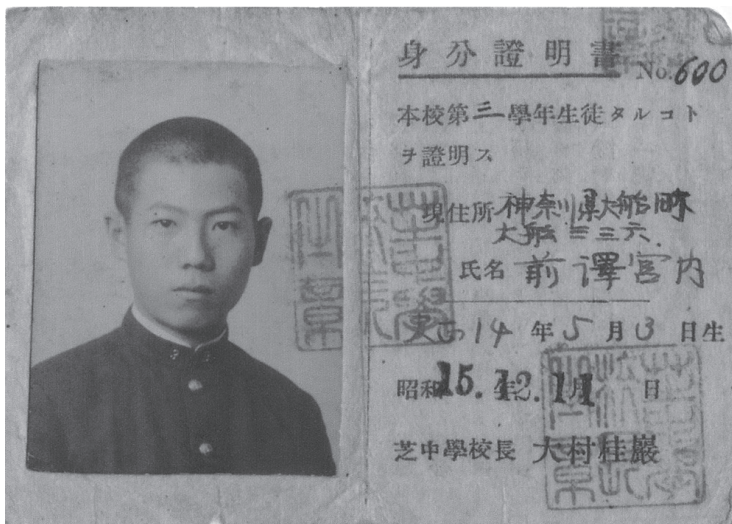
芝中の数学の先生には個性的な方が多かったのではあるまいか。あだ名だけ見ても変わったあだ名である。

有名なのは「お化け」だ。いつでも和服で、大島緋か何か上等の着物をお召しになって、袴を穿き、履物は草履ではなく、靴を履いておられたように記憶している。老眼鏡は鼻の頭にずれて居るし、講義の口調も独特で、塩辛声というのか、「エーイ二乗 プラス ビー二乗」と言う風に、節をつけて、ゆっくりと話された。一度ご自宅に伺ったことがあったが、たしか学校からそう遠くないところで、皆で歩いて行ったように思う。狭い庭のあるこじんまりした質素なお家だった。当時は、相当なご高齢とっていたが、今思えば未だ六十そこそこだったのではあるまいか。

「マッコウ」と言うあだ名の先生も居られた。何故「マッコウ」なのかよくわからなかったが、いつも小柄なお体に、黒い上っ張りを着て、しかめっ面をしておられた。あだ名は鯨とは関係なかったと思うけれど。

講義は明晰で分かりやすく、この先生の時には僕は代数が苦痛ではなくなった。

たしか昭和十五年の正月だったと思うけれど、新年の四方拝の式上、先生は屠蘇機嫌で生徒たちの前に現れ、教員の席でオーケストラの指揮者のように腕



を振ってゴキゲンだった。覚えて居る人も居るだろう。

しかし、それ以来先生の姿は見られなくなった。「不謹慎」と言うことで退職になったらしい。二年E組のときの担任教師はたしか平林先生であった。

数学の先生で、あだ

先生の思い出

名は無かった。公平、公正で、講義は明晰、分かり易かった。幾何と代数を教わった。しかし、幾何を教わって居るときは、代数は他の先生で、代数を教わって居るとき幾何は、他の先生だった。その「他の先生」の名は忘れたが、その先生の講義は分かりにくいので困った。その度に好きと嫌いが入れ替わった。平林先生が担当した授業は分かり易く、僕は幾何も代数も興味が持てた。教え方が上手なのである。

平林先生は漱石の「坊ちゃん」と同じ物理学校出で、戦後、気象大学校の教授になられた。その頃僕は柏の先生のお宅をお尋ねして、ご馳走（といっても戦後食糧難の時代、ふかしイモだったが）になった記憶がある。

分かりやすい講義で忘れてはならないのはもう一人、四、五年生の頃、教えていただいた坪井先生である。先生の講義で、僕は数学音痴にならずに済んだと感謝して居る。先生には柔道部でもお世話になった。

四年になった頃だと思うが、府立一中を定年退職された有名な数学の先生が芝中に来られた。「沓掛斧次郎」という、股旅小説の主人公のような変わったお名前にまずは驚かされた。

沓掛先生は、黒板に難しい問題を出しては、生徒に「誰か解ける人は」と尋ねる。いつも颯爽と手を上げる生徒が一人居て、壇上に上がるとその問題を見事に解いてしまうのである。

小川 哲君であった。僕らはいつも畏敬の眼差しで彼のその姿を見上げていたものである。

その大秀才小川君は、その年、すなわち昭和十六年十二月一日に、四年終了を待たずに、海軍兵学校に入学した。

昭和十八年の元旦、彼は母校に姿を見せた。ネイビーブルーの制服、腰に短剣を吊り、颯爽と挙手の礼をする彼を、僕らは皆憧れの眼差しで囲んで見ていた。これがかれを見た最後だった。

翌昭和十九年秋、海兵を繰り上げ卒業した小川君は海軍少尉として戦艦「山城」に乗り組み、南太平洋に出陣し、戦死した。僅か十九歳だった。惜しい人材を僕等は、そして日本は喪ったのである。

ところで、英会話についても、色々思い出がある。

僕たちの時代にアメリカ人の先生が居て、英会話のクラスがあったというと、「うそ」だと言われることが多い。

今から思うと、芝中はとてもモダンでリベラルな学校だったのである。

僕の兄も芝中25回の卒業で、昭和6年卒だが、当時もアメリカ人の先生が居て、

先生の思い出

英会話の時間があったのだ。先生は、ミセス、エドガスという女性で、兄の写真アルバムに、ブロマイド風のその人の大きな写真が貼ってあったので、覚えて居るのだ。なかなかの美人だった。

僕等が入学してはじめての英会話の時間、僕等は皆これからどんなことが始まるのか、わくわくしていた。とにかく外人の先生と言うのが珍しいのである。

先生はご存知ミセス、スレーブンスだった。なにやらいきなり英語で言われて皆きょとんとしていたように思う。同級に木村君というカリフォルニア生れの日系二世が居た。彼に訊ねると、一人ひとり名前を告げることを求められて居ることがわかった。そこでまた木村君に教えてもらってマイ・ネーム・イズ・何々と答えることから始まった。

英会話の時間は、今で言えば軽度の学級崩壊状態だったかもしれない。皆わいわいがやがやと落ち着かず、そのうちにミセス、スレーブンスが大声で「ワタシノベンキョウ、オボエテクダサーイ！」と黒板を叩いて怒鳴るのだった。

それでも、アメリカ英語と、ニコチン先生などのイギリス英語と、発音が大いに違って居ることなどを知ることができたのは、収穫といえるかもしれない。

出席を取るとき、名前を呼ばれると「ヒヤ」と答えるのだが、何故「イエス」ではなく「ヒヤ」なのか、当時は分からなかった。それは「Here」で「此処に」の意味で在席を示す言葉だった。欠席者の名が呼ばれたときは、近くのもの代って「アブセント」と答えるのだった。



末次 誠君 撮影

先生の思い出

あの頃、今時の ECC みたいな、英会話部とでも言う部でもあって、もう少し真面目に努力していたら、戦後少しは役に立ったかもしれない。思えばもったいないことをしたものだ。

二年になってミセス、スレーブンスがやめて、新たにミセス、ローズという先生が着任した。僕等悪童は、先生の最初の授業のとき、いきなり「ローズ、ズロース、ローズ、ズロース」とはやし立てたのである。

その時ローズ先生は少しも騒がず、おもむろに、黒板に向かって [Rose] [Drawers] と大きく書いて、両者が違うことを落ち着いて説明したので、悪童どもも拍子抜けして、何となくナツク、おとなしくなった。

僕等の時代は、英語を特に排撃するような、偏狭な考えも行動もまだなかった。英語は受験のためには必須の重要科目であることに変わりは無かった。ただ、外人、それも金髪碧眼の女性は未だ珍しい時代だったから、珍しいものに対する幼い好奇心から騒いだけだったと思う。松山中学で「坊ちゃん」が生徒たちに悪さをされたのと同じである。

「鬼畜米英」「敵性言語」とか言って、英語が排撃の対象となったのは、大東亜戦争開始以後、或いはさらに日本の敗戦が色濃くなってからだったのではないか。

僕等の在学中、芝中にはまだ自由の雰囲気、知性と良識が残っていて、僕は五年間の芝中生活の中で、先生に殴られたということは一度もなかったし、殴られるところを見たことも無かった。

軍人出身の「生徒監」という方々が居られて、生徒の服装や行動に眼を光らせていたが、ラッコ、もイモも馬車馬も山猿も、皆よい人で、普通の良識人だったと思う。それが芝中の「遵法自治」という校風だったのだ。

「熱」とあだ名された、若い配属将校が居た。この人は職業軍人ではなく、幹部候補生出身だったようだが、傲慢で評判が悪かった。しかし、この人も暴力を振るっているところを見たことは無かった。

僕らが卒業してもうじき七十年、先生方ももうどなたも鬼籍に入られた。日月は移り、人も変わったが、芝中、芝学園が変わらずに同じところに存在していることを心から嬉しく思う。

一瞬の人生の間、良き師、良き友に恵まれた芝中時代を、特に懐かしく思うこの頃である。

思い出の諸先生のイマジ



数学のテーサン



地理の
山田ダイちゃん



国語の
植松ツあん
(登山、スキー部長)



日露戦争の
岩田さん



大村校長
腹を切れ!



イングリッシュの
ニコチン



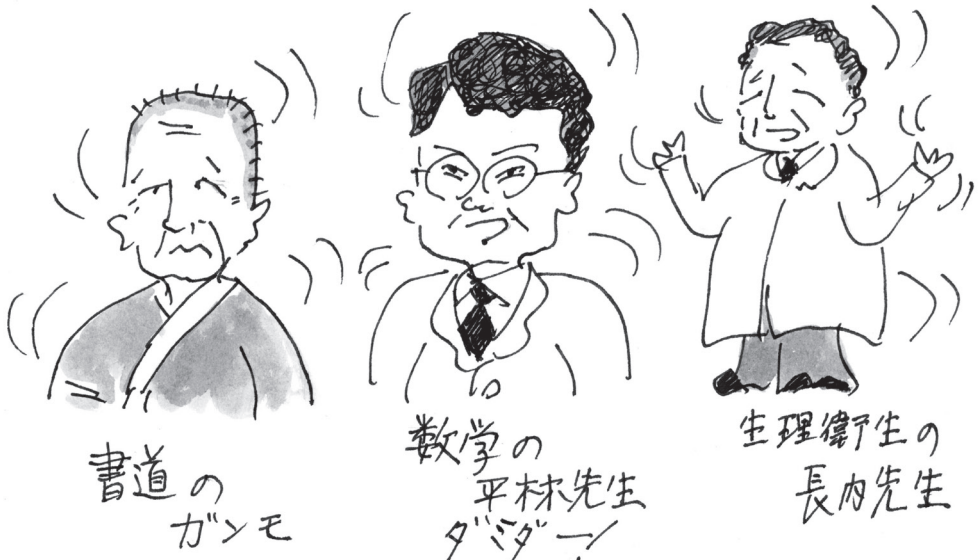
配属将校 ネットカ

シベリヤ出兵
のラッコ教監

馬車馬教監

シマケ軍曹

イモ教監



書道の
ガンモ

数学の
平林先生
ダミダー!

生理衛生の
長内先生

“諸先生方に寸する……
”無礼の殺、平に容赦のほど”

先生の思い出

末次 誠

私どもが、芝中に入学した昭和13年の夏は大変暑い日が続いた様に覚えています。昼になり弁当を食べる時間の事でした。

クラスメイトの服部君が立ち上がり「先生、この弁当は悪くはないでしょうか」と言って、長内先生に持ってきた弁当を渡しました。

先生はニコニコしながら、弁当を鼻で嗅いだ後、目でも調べ、「食べても大丈夫だよ」と言って服部君に返しました。

私はその場の二人のやり取りを見て、深い感銘を覚えました。

今から考えると、二人の姿は教育者と弟子の立派な姿と思えて記憶に残っています。

もう一人深く記憶に残っている先生は、校長先生になられた中島真孝先生です。

先生は確かアメリカの大学を出られたと記憶していますが、軍部や右翼が厳しい中で厳然と哲学に基づく人間の生き方を説かれた事が深く印象に残っています。

更に印象に残っている先生を挙げると、深いヒューマニティに裏付けられた教育をされた英語の吉田先生、有名なエスペランティストである山崎先生。

科学者になる事を夢見た後輩に一生懸命教えて下さった川上先生といった方々が印象に残っています。



故 原田経國君と

海軍の思い出

塩谷 貞次郎（旧姓 中垣）

芝中時代の思い出話しとなれば、戦争の話しになってしまう。

中学4年の時海軍機関学校を受けようとして、当家の一同が受検に反対し受検を中止した時、学校の担任の山田誠蔵先生に職員室に呼ばれて、強く変心を要求された。君は海軍軍人の親を持ちながら受検しないとは如何なる理由かと叱られた。翌年の学年5年の時受検して合格した時一番喜んでくれたのはこの先生であった。

この先生の長男こそ兵学校65期の山田昌平氏で有名な艦爆搭乗員で17年10月26日の南太平洋海戦で戦死してしまった。丁度私が入校が決まり入校式が12月1日であったが、先生の戦死が内的に知らされたのが11月に入ってから、戦死された長男は当時大尉でショッペイと呼ばれた有名な猛者であつたらしく評判となっていた搭乗員と言われた。担任の先生はダイナマイトと言われていたから、親子のなんかの繋がりがあつたと思う。海軍入校前の私は目黒大岡山の先生宅へお線香に行ったが、先生は歯を食いしばって私に向つて君もしっかり頑張れと言われたがその先生の姿は終身忘れられない姿であった。

先生宅の隣に国語の有名な先生、植松寿樹先生の家あり、先生の長男は私の1年上の海軍生徒で機関学校に入学中であつたという繋がりもあつた。長男昇さんは平成10年に死去されたが。私は17年12月海機に入学した、そして私の軍隊の生活が始まつた。

16年12月芝中4学年から小川哲君が兵学校に入校していたが、18年5月私の学校訓練で江田島に行った時、お互いに探しあつて話し合いが出来て、短い時間を過したがそれが生時の最後となつた。彼は次の年に卒業を早められて19-2・22卒した。始め、夕張乗組み、海戦で4月27日沈没、生き残つて戦艦山城に乗り込み、レイテ沖戦闘で沈没、



海軍時代

戦時中の思い出

10月25日彼は戦死してしまいました。小川君は成績も素晴らしかったようで、73期卒業901人中49番であった。クラスの戦死された数は282名である。

去年22年のホテルでの会で山口敦二さんと始めて話し合ったが戦争時の記録幹事を立派にされていた事を知って敬意を表しております。いつまでも元気であられん事を祈ります。以上

予科練

山口 敦二

私は、海軍甲飛十二期予科練習生として、三重海軍航空隊に、昭和十八年四月一日に入隊した。

当時は、予科練の名称も未知であり、その存在を知ったのは、恩師山田誠蔵先生からの推めでした。少年時代より軍人になる、飛行機の操縦がしたいと夢みていましたので、大東亜戦争開戦以来、華々しい活躍をみせた海鷲としての幹部養成ということで、飛びつき志願を志した。

山田先生は優しい先生だったが、怒れば烈火の如く「ダイナマイト」の愛称通りの「ダイちゃん先生」でした。



昭和19年3月 飛行兵長
奈良・丹波市にて

御子息、昌平氏は、海兵「六十五期」最も活躍のめざましい時代の艦爆の操縦員として、ハワイ攻撃、ミッドウェイ攻撃参加、武勲輝やかな六尺豊かな猛者でありました。そのご南太平洋海戦にて、急降下爆撃で敵空母を撃沈し、被弾、火を噴くも、更に敵駆逐艦に自爆し撃沈、「一機よく二艦を屠る」として、特別感状を授与され、二階級特進の栄与を受けられた猛将である。

戦後、零戦搭乗員会の志賀会長（海兵六十二期）から伺った話として、空母赤城で共に闘かわれ、「昌平」の

戦時中の思い出

名前から「ショッペイ」と呼ばれ、愛された豪の者と聞く。

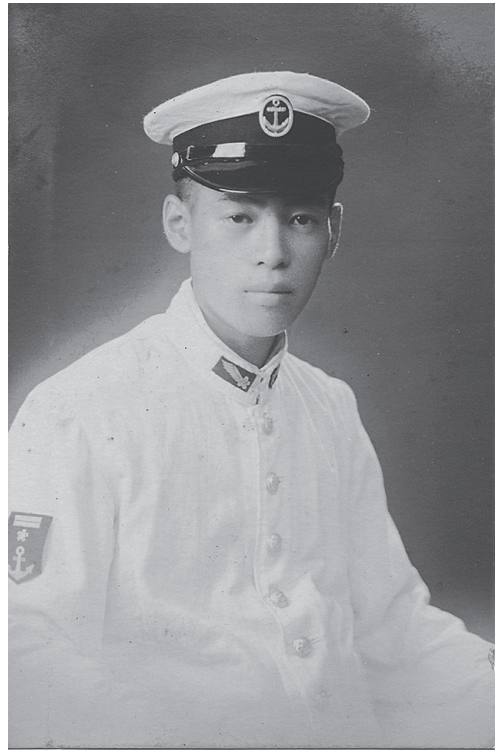
私は、予科練練成一年間の中、三ヶ月目位に、操縦と偵察の適性検査飛行があり、鈴鹿航空隊での検査を受け、幸い操縦分隊に所属することが出来て、六ヶ月後の十月一日に兵長に昇進し、十一月に、新設の奈良、丹波市の天理教宿舎を借り上げた奈良分遣隊に移り、後輩十三期の指導練習を務め、十九年三月に卒業する。

芝中同期からは神谷町で薬局の山崎三郎君、ラッパの村上君と三人が入隊した。村上君は土浦航空隊へ、山崎君と私は、三重航空隊に入隊した。二人は偵察員として戦列についたが、昭和二十年五月に沖縄戦で共に戦死された。

予科練卒業後は、操縦分隊は、ガソリン不足の中、南方フィリッピンにて、飛行機を運んで飛行訓練を行う、海軍が初めての南方練習航空隊が発足し、勇躍その途につき、昭和十九年四月上旬に呉軍港を出港した。

その刻、軍港内に戦艦「大和」と「武蔵」が停泊中で、「大和」は岸壁に接岸し、「武蔵」は沖に投錨中、写真の公表もない当時、始めて見る両艦の巨大さに驚き乍ら、その逞しい雄姿に感激しての出港であった。戦後の情報として、両艦の同一港停泊は、その歴史の中で三回しかなかった由で、呉軍港とトラック軍港のみと聞いた。その貴重な姿を脛に写し乍ら出港したが、正面からみた態は、将にタライの真中に艦橋の櫓がたつ感があったことが思い出される。

その時に、上官から「お前達日本の姿を見るのは恐らく二度とないであろう。良く見ておけ」と言われ、自分の心の中に、「いや俺は絶対生きて帰ってみせる」と誓ったことも思い出となり、又それを実現出来たことを今か



故 山崎三郎
(昭和 20 年 6 月 8 日
沖縄戦死)

戦時中の思い出

みしめている。

敵潜水艦の数多徘徊する中を、一路、フィリッピンミンダナオ島「サランガニー基地」を目指して航海が始まった。敵潜水艦の魚雷をさけることは見張りによる魚雷の航跡の発見しかなく、発見によって船を魚雷にむけて直進させ、舳先により魚雷を左右にさけるのみであり、早期発見が望まれ、四時間交代で「6ワッチ」体制で3人3組で舳先と船橋と船尾に望遠鏡の見張りについた。嵐の中を黄色い胃液を吐き乍ら必死の見張りをつづけ、何回かの魚雷攻撃をさけて、「台湾」、「マニラ」、「セブ」、「レイテ」と寄港し、昭和十九年四月末に無事「サランガニー基地」に着任、半年の飛行訓練を終えて、次なる延長教育（実用機教程）をシンガポール、セレーター基地にて終了し、晴れて零戦搭乗員となり、マレー半島バトバハ基地を経て、ジャワ島スラバヤ基地に着任、更にジョクジャカルタ基地に移り訓練を続ける。



昭和20年4月 一等飛行兵曹
ジャワ島 スラバヤにて

しかし、刻、米軍の進攻が始まり、「ボルネオ島」に上陸開始、「ジャワ島」上陸も、間近となり、飛行機は特攻機とする為使用出来ず、米軍の上陸に備えて、挺身切込み作戦の訓練に入る。無言のまま敵陣地に迫り、抜刀による肉迫攻撃をすること、或は「タコ壺」にかくれ、敵戦車に爆雷共に自爆する特攻訓練を日夜南方のイバラの原野で繰り返し続けていた。

その刻、特攻隊の命令が下り、飛行機で死ぬことの出来る喜びを胸に、空路、台湾虎尾基地に転進し、昭和二十年七月末日に、神風特別攻撃隊竜虎隊を拝命し、昼間は通用しなくなった、月明の夜間特攻による沖縄特攻作戦に参加し、夜間飛行に

■戦時中の思い出

よる特攻猛訓練が始まった。そして八月十五日の終戦を迎え、一命を取り止め、翌二十一年三月に復員した。幸い、目黒の家は、不発焼夷弾により戦災を免れ、戦後の生活に入った。

海軍の体験として、尻を「バッター」でたたかれ、アゴはポカポカ、罰直と称する体力の限界迄の責め、その辛さ、いつかこの恨みはらさずばと思うことしきり、「弾は前から来るとは限らない、後からくる弾もある」と兵隊言葉あり、しかしそれを切り抜けるしかない運命に死にもの狂いで挑戦、その刻を考えれば何も恐^{こわ}いものなしとその後も生き抜き、貴重な体験をしたと感謝している。

しかし最も熾烈な戦闘機教育は、七十年近くたった今日も生きて、同期の中でも、抜群の働きを見せていることを思えば、得難き試煉であり、今思えば、有難いことと言わざるを得ないし、その恨みとの落差をかみしめ、複雑な思いをしている。

戦後の苦労もいろいろあったものの、戦争中のそれに比べれば比べようもなく、楽に生き抜いて来たが、予科練で毎晩、温習後に唱えた、五省の「至誠」、「言行」、「気力」、「努力」、「不精」の戒めがそのまま身につき、わが信条となり、守り抜いて来たことを誇りに思い「吾人生に悔いなし」の心境であります。

平成二年十二月に「予科練と戦場」なる本を、「国書刊行会」よりB5版100頁単行本で出版し、己の軍歴を記録し、同期の記しとした。

この度、芝中「三七芝会」として記録を残すこととなりましたが。

今、諸兄と語り合えることは、戦後の経済界他で活躍し、戦後の復興を支えた数多くの同級生のあったこと、又その基礎となった、芝中の教育方針、「質実剛健」気風の中で、個性豊かな諸先生のおられた事が思い出されます。

黒い服の山田ダイちゃん先生、国学の雄、ダンディーな植松先生、楽しかった長内先生、生徒監のラッコ先生、等々懐しく思い出され、改めて感謝の言葉を捧げたいと念じます。

以上

闇夜の箱根越え

荒井 謙治

七十年の昔のことを、思い出すのは難しい、しかも何時になっても忘れない。四年生か、五年生かわからない、多分四年生か、季節は春、夏、秋、だかわからない、多分秋だろう。

御殿場の駒門演習場^{こまかど}で、三泊四日の軍事教練の終りに、夜中の午前零時出発の、帰りの夜行軍を始めた。

教練服にゲートルを巻き、銃剣と弾薬入れを腰にしめ、陸軍のお古の三八銃を背にした、完全武装の夜行軍である。途中照明なし、休憩なし、の箱根を越えて、三〇～四〇キロの闇行軍である。

御殿場を過ぎ、長いジグザグの登りを、まわりの風景も何も見えない闇夜を、黙々と登って、乙女峠を越えた。峠を越えてから箱根裏街道の、やや登りを歩くころ、眼はよく見えない、音も聞えず、ただ目の路面と側溝を見て歩いた。

そのうち路面の曲面が、だんだんまるく見え、体が側溝へ流れてゆく、けんめいに路面中央へ歩くが、路面の曲面が強くなり体が側溝へ流れていってしまう。この感じが繰り返し、なんべんも続いた。ほんとうに側溝に落ちないように、必死だった。多分このとき私は歩きながら、眠っていたのではないか、夢心地の箱根の尾根路は長かった。

この夢心地の必死の闇行軍は忘れられない。箱根の尾根から、強羅を下って、小田原までの下りは、殆んど何もおぼえていない。

ただ小田原で全員そろって、行軍終了後、解散したあと、疲れもあったが、無性に腹がへって、街のそば屋に飛込んで、食べたカレーそばが、とてつもなくおいしかった。

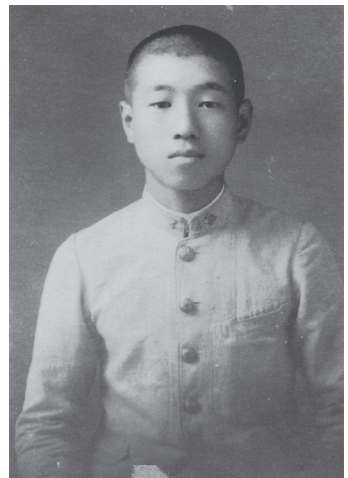
このときから七十年後の今でも、私はそば屋に入ると、カレーそばを食べることが多い。

小田原でひと休みして、帰りの小田急で恥も外聞もなく、電車の床に尻を落して、新宿まで寝て帰った。

私はこの箱根越以来、歩きながら寝られるし、眠りながら歩けると思っている。

それとこの箱根越えはつかれたが、何んとも云えない身にしみた、楽しみがあった。

これからもそば屋に入るたびに、思い出すのが楽しみである。



三七芝会のことども

川合又二

毎年この頃になると「芝中時代」若かりし日々のことをアルバムを眺めながら思い出す。

あれから何と50～60年。日本はこれが見納めと米沢と2人で樺太行を敢行した。米沢の父君には大変迷惑をかけた。

又最初で最後の夏休暇では米沢と青木の3人で一杯やって銀ブラと洒落込んだ。最後は銀座一流の写真館で晴姿を撮る。ご覧あれ。



川合 青木 米沢

友を思う

土屋 敏郎（書号 有梅）

先は亡くなられた同窓諸兄の御冥福を心より御祈り申し上げます。



卒業以来七十年、在学中に親しかった人、又其後も亡くなる迄親交のあった方達、思いは限りなく尽きません。又小林義栄君始め池谷、矢吹、滝本、中島、鈴木君等会をこゝ迄続けてこられた皆さんには有難く感謝を致します。

私が卒業以来本人が亡くなる迄ずっと交流を深めてきたの

は、倉橋純一君（建築家 六代目桂文楽師の弟子）二人で上野本牧亭を中心に独演会を十数年続けてきた 先代小さん正蔵等が応援（残念乍ら昭和四十四年早世す）杉崎一雄君（折口信夫氏の弟子 平安時代の敬語の研究で文学博士 広辞苑の編集者の一人（平成十年歿）長内正雄君（自衛隊医官 私の主治医 お互の婚礼に出席 平成二十二年歿）菊池公明君（自衛隊衛生学校教官 娘さんがピアニスト）本村鉄郎君（私が手引きをして写経を勧め 励んで法華経二十八品を素晴らしい大作の書作品として書上げた。書作中筆を持ったまゝ成佛した 平成二十一年歿）原田経国君（医師 近くに居た飲み友達 平成二十三年歿）等々永く楽しい交流であったので今でも一入感深い思いがあります。

私自身は長い間病の間屋の様に過ごして来ましたが幸い、お陰様で子供時からの好きな道、古来よりの書法の研究を七十年只々、未だに毎日懸命に楽しんで居ります。又七十歳になってから、佛陀の道、シルクロード横断を少しづつ、十五年一七〇日かけて永年の夢が達成出来ましたことは無上の喜びです。

皆さんも元気で健康に留意の上お互に夢を持って楽しく余生を過ごしましょう。

生きてる友と亡くなった友へ

佐藤 定幸

敗戦の年の春、「来年の今頃までに間違いなく死んでいる」と私は覚悟を決めた。その年の初めに陸軍機甲整備学校に「特甲幹」として入学した私だったが、本務たる自動車整備についてごく初歩的な教育をうけてはいた。しかし、敗戦間近とあって整備すべき自動車は揃わぬばかりか、運転に必要なガソリンにすら事欠く始末だった。今は昔、「木炭車」の時代、薪を焚いて自動車を動かす時代だった。

迫りくる「本土決戦」を前にして、とても満足な技術的訓練をする余裕のなくなった陸軍は、われわれを専ら上陸した米軍を迎え撃つべき「タコ壺」攻撃用要員に仕立て上げる努力をしていた。九十九里海岸の砂浜のタコ壺に潜伏し、上陸した米軍戦車がその上に来た時、持ち込んだ爆薬とともに自爆するという「捨て身」案だった。現在アラブの過激派が常用しているアレである。

そんな姑息な反撃で米軍の本土上陸を阻止できるとは思われず、われわれ「タコ壺」要員は、たいした効果もあげられず、ただ死を待つばかりだった。だが、そんなバカな戦術は止めろなどと云い出せる訳がない。正に死を待つ以外の選択は許されなかった。

それが八月十五日の敗戦とともに一変し、われわれは生き続けることができるようになった。必死から生への逆転に誰がよろこばずにいられようか。もちろんなかには悲憤のあまり自ら死を選んだ人々もいたが、国民の大半は死を免れたことを喜こんだ。われわれが属していた陸軍機甲整備学校でも、敗戦直後の「慰労会」で、陸士出身の大尉が余興にジャズの「リンゴの木の下で」を唄って、われわれを驚かせた程である。

ともあれ、こうした生と死の逆転劇を経てわれわれの戦後生活は始まった。戦後六十六年間はそれはそれで波瀾に富んだ、厳しい年月だった。だが、今日、三七芝会の盛況をみる事ができたわれわれは幸せ者といわねばならない。三七芝会のメンバーの生存率は恐らく三〇%前後と思われるが、やはり長生きに勝る幸せはないというのが筆者の感慨である。寅さんの「科白」ではないが、「生きてるうちが花なのよ、死んでしまえばそれまでよ」なのだ。

筆者のほかにも多くの三七芝会メンバーが八月十五日のおかげで今日まで生き続ける事ができた。それにつけても少からぬ学友が戦争が終り平和が訪れたというのに姿を見せなかった。とくに個人的につき合いの深かった某君、某々君らの顔が今でも時折、裏に浮かんでくる。この六十有余年の間に亡くなった人々もそうだが、とくに卒業後、敗戦前後に亡くなった友人の姿がしのばれる。かれらにとって人生とは何だったのか。御成佛を祈るや切。



詩

堀内 昇

小生は只々大学受験の為に芝中に通っていましたが、同級生の中に詩を創るのがいて、小生は驚ろき且つ敬意を表せざるを得ない事を経験させて頂きました。その詩の内容は「雲」の事でした。

空を眺めていると、(仰むけに公園の芝生の上に横になって)雲が真上を走って行く。或る白い雲は早く、或る灰色の雲は遅く皆過ぎ去って行く。その筆者は吸い込まれる様な気になって雲を見つめた。そしてその筆者は続けた。その雲の後に広がっている空間に、永遠と云う匂いがする。とかあった。それを讀んだ時は、小生は何も感じなかったが、その後度々思い出しては、詩なんて何と素晴らしいものかと、その当時感じていた。その同級生は確か石黒となのっていた気がするが、石黒君はその后兵隊に行っただろうか、我々は皆兵役に行って、軍隊のよい所と悪い所を見て来たが、あの繊細な神経の持主は、軍隊で苦しんだのではないか、そして今思うと全く戦争は何人か才能のある少年の命を奪った無謀なものだったと云う気がしてならない。



末次 誠君 撮影

ああ満州

石井 宏

略歴

私は1925年12月東京に生れ、1943年宇都宮高等農林学校農業土木科に入学した。

わずか一年間の基礎知識の座学授業を経て食糧増産業務を命ぜられて、1944年の夏、其の頃日本政府が支配していた中国黒竜省甘南県で、当時の満洲開拓公社が実施中の約10万haの草地からの農地造成事業の監督補助に派遣させられた。1945年夏太平洋戦争が収束し私は極めていびつな学業経験を土産にして学窓を後にした。幸い翌年埼玉県の技術吏員に採用され、更に1961年福島県農地林務部に転じた。時あたかも「土地改良事業設計基準」改定の時期と重なり県営事業規模の計画立案、工事施工方法等に就いて勉強する機会に恵まれた。



1981年埼玉県を定年退職し、直ちにJICAの「灌漑」専門家としてマレーシアの農業省灌漑排水局に派遣された。その3年間の勤務では戦時に中国東北部の農地造成事業に他国民を指導者する際のマナーが大いに役に立った。帰国して東京のコンサルタント会社に勤務して中近東諸国の政府要人に対してアドバイスをした。更に国内の水田農業経営の改善助言業務や全国の土地改良コンサルタント業務に従事したり、JICA調査委託業務で中国南部水田地帯の大規模土地改良計画の現地調査に従事した。更に視野を変えてドイツを主とする西欧農村計画の実態を調査し「ビオトープ思想」を国内に啓蒙する機会を得た。

1997年東京農工大学博士課程に入学し福島県の土地改良区の歴史と分類、及び将来の展望を論じて学位を取得した。

以下時代的に特記事項を並べる。

ああ満州

1944年、高等農林2年となった私達の入営延期組11名は六月始め、山田伴次郎教授の引率のもとで、6月の玄界灘をジグザク航路でアメリカ海軍の潜水艦の襲撃をかわして朝鮮の釜山に上陸した。

更に朝鮮半島を北上し、当時の満州国首都新京市に存在した「満州開拓公社」で作業現場への割り当てが確定した。私の派遣現場は旧ロシアの近代都会「齊齊哈爾・チチハルの更に北方約300kmの、北緯47度東経125度付近の一大草原地帯である。現場に到着するには、満州国鉄列車を拉哈（ラハ）駅で下車して、更に資財運搬用の軽便鉄道で30km程北西に走り、そこから馬車で半日は揺れる必要があった。馬車道の左右は一面に黄色（ニッコウキスゲ）と薄紫色（キキョウ）の花が咲き乱れ、天国を想像させられた。平面、一帯の草原には野生のオオカミとノロ（シカの仲間）が生息しており緊張させられた。

宿舎に到着の夜食は赤飯で歓迎して呉れて内地の食料不足と比較して凄く裕福

な食糧事情に威かされた。然し何日も赤飯が続くのを訝ると赤い米と認識したのは実は高粱だと聞かされてガッカリさせられた。現場事務所には幼いオオカミが飼われており、毎晩の遠吠えには驚かされた。付近一帯の標高は約 110 m 前後で、水系的にはアムール水系に属し、遙か間宮海峡迄続きその地形勾配は約 1/10,000 程度である。

アムール上流 Nenjiang の農地造成予定地域は遠い昔には畑であったが、洪水により草原と化したとの事である。その為、古い畝跡の幅が私の歩幅と合致せず歩行のリズムを崩し、疲労の一助になった。毎日の現場を歩く時間は概ね 4 時間乃至 5 至時間で、両の足固めは日本式陸軍歩兵伝統のゲートルを巻き、指の分かれてない地下足袋であった。指の分かれる地下足袋で草原を歩くと、貴重な燃料になる洋草（ヤンツォ）が指に絡まるからである。かように毎日現場を歩いて靴底を通して感ずるのは、あっちこちに一段と高く盛り土された古い宅地の存在跡が確認され、（そこにオオカミの巣があると脅かされた）直感出来たのはこの北限地域は決して「無人の沃野」（Nomanland）では無いと確認された。入学当初に蛮声を張り上げて歌った「無人の沃野われを待つ」は大きな過ちだった。

年間雨量は約 500mm 程度で、私の勤務期間中には、思い雲が低く垂れ込めた時もあったが遂に一滴の降雨もなかった。

満州開拓公社の計画は概ね次の如きものである。計画面積は約十万ヘクタールで、その北部の「ノンコウ」に大規模な頭首工を設置して必要水量を取水する。灌漑用水路と排水路を数条設置するもので、私の配属された工区はその一番下流部分（南部）で、用水路と排水路が約 2 km 間隔の相互に配置された。いずれの水路も直線でそれらの延長は各々約 10km ある。私は用水路（高さ約 5 m 底辺幅約 15 m の盛土工事）の現場の監督補助とその巡視の責任を命ぜられた。施工担当者は年齢も私と同じような若い青年勤奉隊（チンホイタイ）による人力依存である。彼らは草原に臨時設置された野宿生活で軍隊組織による作業の連続である。そして日々の作業量を確認するのが私の任務だ。彼らの計算する土量と公社の設計図が示す土量とが一致しないので其の調整に苦勞させられた。このようなトラブルに際しては、満拓の上司は常々、「絶対に正しい」と主張せよとの指導だった。然し私は現地の作業員に対して満拓職員の権威と暴力を振るうことはしなかった。

通常私は徒歩で現場を回るのだが、あるとき乗馬で回った。出来上がったばかりの盛土の「天端」に上がった途端、馬の四脚がズボッと土の中に埋没し馬の腹が盛り土に達して歩行不能になった。私も馬も驚いたが、その理由はこうだった。水路工事と平行して機械開墾工事が進み、ドイツのジョンディア製トラクターが牽引する、プラウが反転した幅 50cm 程度、厚さ 20cm 程度の土の帯を、ズル賢い作業員が煉瓦状に刻み、盛り土に転用して表面を繕い、作業ノルマを達成した如く装ったものである。私は直ちに付近にいた勤奉隊員幹部を呼びこの状況を確認させた。面通を失った幹部中隊長は隊員責任者の頬を殴らせた。自尊心の高い彼らにとってこの事は異邦人の前でこのような措置は甚だしい屈辱であったに違い無かった。私はこの処置を確認して現場を去った。

覚えてますか？

鈴木博視

(1) 我々1年生から2年生頃迄門衛を司り芝中の名物男と云われた岩田為吉氏。日露戦争で金鷄勲章功7級の勇士であり生徒の遅刻を取締られ厳格であったが、生徒・先生から親しまれ慕われたラッパの名手であった由先輩の話ではラッパの音は神谷町迄届いたとか。

(2) 芝中の精神と教育の基礎は、渡辺海旭先生が明治44年に芝の校長に就任され昭和8年に至る22年の間に確立されたと加藤貞斉教頭が述べられておられた。芝の教育方針は学術優先が主である市内の中学より、操行優先を第1だと諸先生が主張され、その線でやってゆく事に校長も賛成されその伝統が現在も続行されており芝中の姿でもある。父兄は操行優先教育に注目される様になり評判が高まり有名校の中に選ばれる存在となる。

(3) 渡辺海旭先生は大正12年の関東大震災の時学校を開放し避難民を受入れ、焼けた芝郵便局を校内に開局し混乱收拾し注目された、先生は又飲料品カルピスの名付親であり我々が赤ちゃん時代の昭和3年「ムーランルージュ新宿座のトップ女優`明日待子、さんのカルピスの`初恋の味、のポスターで有名となる。待子さんは現在91才で5條流宗家の家元で日本舞踊を続けておられる。実は本年6月東京プリンスホテルで行われた芝同窓会大会では`カルピス、で全員が乾杯し会が開始されました。

渡辺先生の筆号`壺月、が新宿中村屋の`羊かん、の名となり生涯風雅をただよわせた名僧でもあり、校庭に先生の銅像が今でも輝いて居られる。

(4) 我々昭和13年4月入学時は大村桂巖先生が校長で`やぎひげ、が特に目立った。昭和17年中島眞孝先生が校長になられた、戦時中でもあり野外教練が多々あり昭和18年1月か2月当時の配属将校が真冬の寒い日渡河訓練と称して多摩川で支流渡河を強行した、翌日風邪を引いたりびしょぬれで体力的不良で欠席者が続出し父兄も受験をひかえた重要な時期なのに何でこんな無茶な教練をするんだと苦情続出、中島校長は配属将校を呼びつけ相当の苦言を申し渡したと聞いた、生徒思いの校長であった。

半分はわすれてしまったけれど、卒業式では`大地にがっちり足をつけて1歩1歩理想に向かって進め、と我々を激励された事を覚えている、とても勇気づけられた。

ご遺族より

瀧本初枝

前略

突然この様なお手紙差し上げます失礼お許してください。私秀明の妻、初枝と申します。実は夫、秀明は三月十日午後五時三十四分、突然両親の元に旅立ってしまいました。翌十一日には東北地方を中心とした大地震、当地でも今迄に経験した事のない、五弱と云う大変な揺れに見舞われました。その後、停電、交通麻痺にと、事態はいつ治まるのかわからない日々が続きました。従って、色々相談の末、誰方様にも、お知らせしないまゝ、家族のみにて送りましよう、年末のごあいさつ迄、失礼する事に致しました。今回も、そのように…と考えましたが、時々いたゞきますお電話、お手紙等で皆様から、おやさしく、いたわりのお言葉を頂戴いたしておりました事も、聞き及んでおりましたので、今回この様なお知らせをする事にいたしました。先日無事納骨も終り、今は両親、兄姉の眠る、黄泉の国で苦しみもなく、安らかな日々を送っているのではないかと、考える事に致しております。夫が存命の折に此の度のお手紙を戴きましたならば、必ず賛同申し上げていたのではないかと存じます。又、鈴木様には度々お電話で私もろくに御あいさつもいたしませんで、失礼していました。どうぞ、御許し下さいませ。末筆になりましたが、皆様に呉々もよろしくお伝えいたゞき度く存じます。今迄の皆様の御厚宜に心より深く感謝申し上げ、暑さに向います折、呉々も御身御自愛下さいませよう、念じております。尚、最後になりましたが、三・七芝会の思い出綴り出版のお役に立て、いたゞけましたら、幸甚に存じます。

一、金 五千円同封させて戴きます。

大変、不躰に永々と書き並べました、どうぞ今後お気になさいませよう、お願い申し上げます。

鈴木様

乱筆にて

かしこ

瀧本（内）

ご家族より

石井園子

三七芝会は今も変わらず益々の御発展、大勢の皆様のお蔭でございます。東京出張の折り、会と重なると参加して、楽しく過ごしたと聞いております。残念ですが、石井忠雄は脳梗塞の後遺症で失語症になり、上京は出来ません。NHKでは徳川の姫のドラマが多く、芝増上寺の紹介があり、懐かしく楽しみにしています。

23年7月8日

田村 純（妻 明子）

三七芝会の皆様には長年にわたり大変お世話になりました心から感謝申し上げます。

主人は元来健康で会社人間でしたが、ここ二、三年前より歩行困難になり老人によくある諸症状のため、ご依頼の「芝学園時代の思い出」を書くことが出来ません。主人は大森に生まれて以来現在まで転居の経験がありません。玄関に入って一番に目につくのは一九五五年に描かれた鈴木亜夫先生の山の絵です。他にもバラの花の絵もあります。主人の芝中時代はとても利かん坊だったと聞いております。芝学園から陸軍士官学校 東大 住友商事に入社、五五才



から住友建設に移りました。商事では同期の鞍掛敏久さんと一緒に仕事をしました。家の近所に池上信太郎さん、小林義栄さんのお姉様の家がありました。今はありません。

毎年日比谷公会堂で小林さんがなさっていた旧制高校寮歌祭の応援に二人でまいりました。又、芝学園の同窓会にも一緒に行きまして楽しい思い出を沢山頂きました。

伝統ある芝学園で立派な先生やよいお友達に恵まれて勉強した主人は本当に幸せに思います。二人の兄が戦死したあと、三男の主人は両親姉妹を大切に育てて面倒を見ていましたが皆他界致しました。父が亡くなった九二才迄は頑張って生きたいものだと思っています。振り返れば、戦中戦後の大変な時代を過ごしてきましたが、晩年は楽しいことも沢山ありいい人生だったと申しております。

三七芝会の皆様のご健康とご長寿を心からお祈り申し上げます。

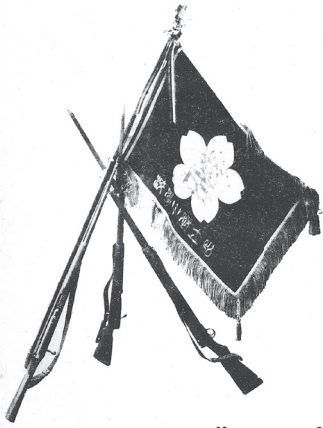
平成二三年七月吉日

校歌

一
 汝の學校いつくにあらず
 三縁山内伽藍の後
 松柏滴まぬ緑の中に
 芝中堂の堂は高し

二
 汝の校旗は何ものかぞ
 日本國民世界に誇り
 櫻の花を染めたり赤く
 その色即ち我等の心

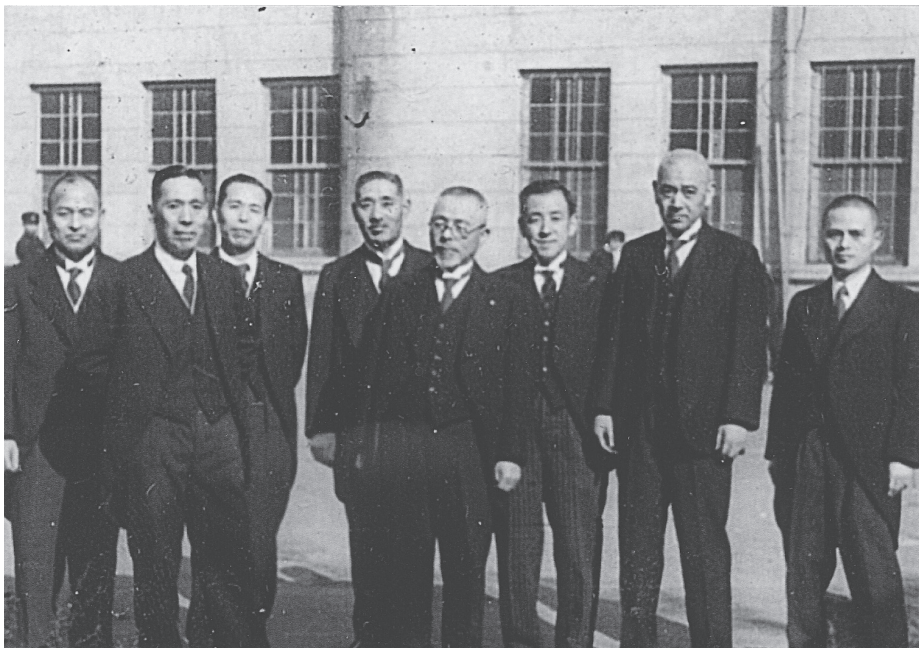
三
 汝の希望は如何に語り
 日進月歩の皇國の爲に
 功を立てて名をらん我等
 芝中堂の卒業生と



昭和五年三月
 敬書校訓
 壹月海旭

遵法自治

校旗及校歌



昭和15年頃

卒業アルバムの諸先生



大井田先生 三波先生

坪井先生

山田(正)先生

樹下先生

塩竈先生

慶野先生

北川先生

奈倉先生

峰島先生

美濃部先生

相馬先生

川上先生

松本先生

吉田(景)先生

今岡先生

東島先生

粕谷先生

中島校長先生

阿部先生

坊城先生

長内先生

梅田先生

植松先生

加藤先生

永野先生

後藤先生

池田先生

川端先生

榊先生

藤井先生

草野先生

遠藤先生

山田(誠)先生

沓掛先生

半田先生

石井先生

松橋先生

上田先生

佐藤先生

小暮先生

岸田先生

山崎先生

吉田(政)先生

初代 小林義栄君



2代目 中島直忠君



3代目 鈴木博視君





平成 19 年 11 月 26 日



平成 22 年 11 月 13 日



平成 15 年 10 月 22 日
鈴木君、中島君、矢吹君

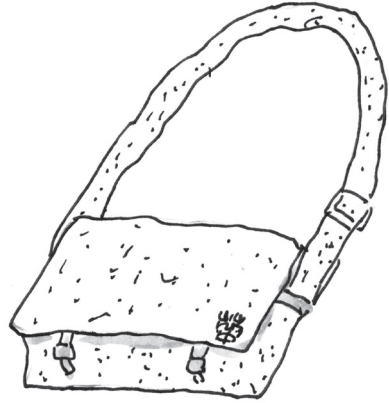


白金小学校からの仲間（平成 22 年 11 月 13 日）
鈴木君、高木君、望月君、山口君

三七芝会スナップ



故滝本秀明君 故小林義栄君



肩かけカバン



故池谷君 前沢君 平出君



故山本君 故海老原君



故原田君



故伊東君 故平井君

三七芝会スナップ



故高橋 務君



故長野 達君



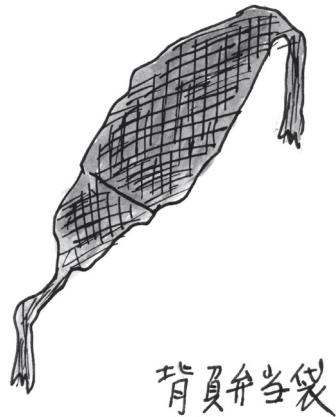
島田君 川合君 鈴木君



荒井君 故山本君



幹事受付 宮沢君 故永嶋君



背負弁当袋

幹事会スナップ



鈴木君 故原田君 故長野君
故本村君 土屋君 末次君

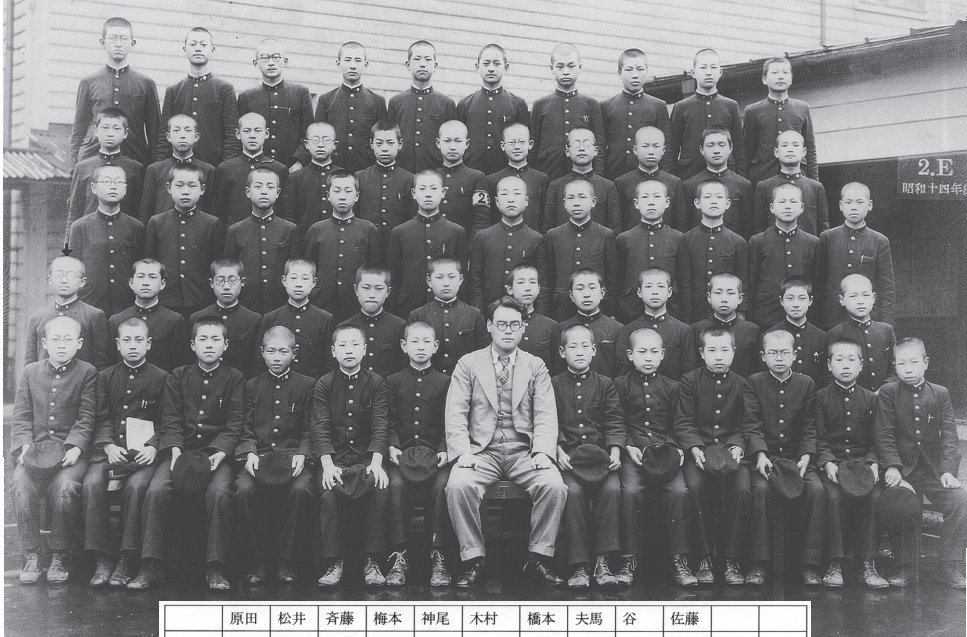


川合君 故原田君 故本村君



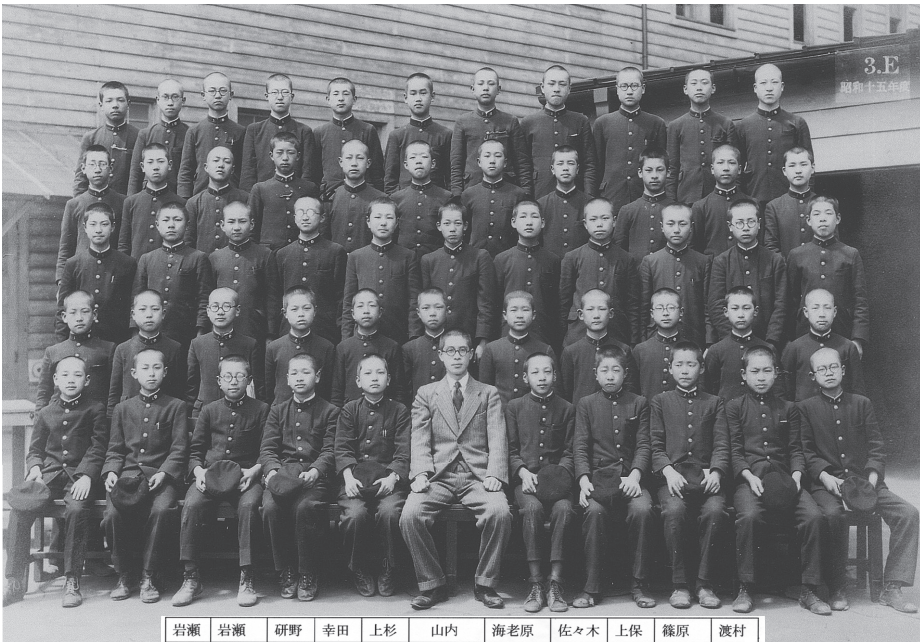
末次君 故本村君 故長野君

2年E組（昭和14年）



	原田	松井	斉藤	梅本	神尾	木村	橋本	夫馬	谷	佐藤			
	中西	加藤	相場	山崎	海老原	福島	鴨井	子田	海老	菊池			
	山下	小林	丸山	山口	佐藤	山本	森藤	前沢	川合	米沢	島田		
	平林	長野	草野	神山	木田	松本	臼井	竹葉	高橋	斉藤	清	岩瀬	
	小久保	鈴木	森田	原口	間川	林	平林	永井	伊東	雨森	小寺	小池	水上

3年E組（昭和15年）



岩瀬	岩瀬	研野	幸田	上杉	山内	海老原	佐々木	上保	篠原	渡村	
	佐藤	鈴木	伊東	倉田	井田	山口	野間	浜田	渡辺	須磨	
	清	山室	松本	平林	佐田	谷	窪田	中島	菊池	盛永	中村
	永井	小林	宮崎	近藤	高橋	高木	木口	倉橋	橋本	原田	高山
	渡野	永田	三宅	片岡	芝原	相馬先生	福永	石黒	加藤	伊藤	小寺

4年E組（昭和16年）



原田	山内	大場	大河原	稲積	加藤	山下	金子	小林	麻生	上杉
	有坂	北村	海野	鳥羽	森田	阿部	井田	堀田	中西	
野間	園田	白木	内田	佐田	大竹	井上	鴨井	千石	前沢	
	窪田	舟橋	久保山	白井	北沢	森永	秋本	近藤	菊池	小寺
平林	石黒	木口	田中	西澤	坪井先生	長井	道野	会澤	佐藤	谷

竹岡臨海寮（昭和13年）



平林 眞君 提供
金子 義信君



昭和十三年五月六日河口湖

河口湖畔修学旅行 1年D組（昭和13年）



軍事教練、富士裾野滝ヶ原 4年生（昭和16年）



3E 箱根大涌谷 S 15・5 24

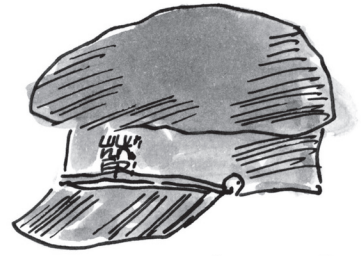
箱根大桶谷修学旅行（昭和15年5月24日）



富士裾野 富士岡荘（昭和17年7月20日）



谷君
美濃部先生
佐藤君
中村君



制帽



教室より講堂を望む



芝中農場

中村(礼)君
前沢君
長野君 海老原君
北沢君 野間君 田実君



平林君 佐藤君 窪田君
鈴木君 竹葉君



故本村君 森藤君



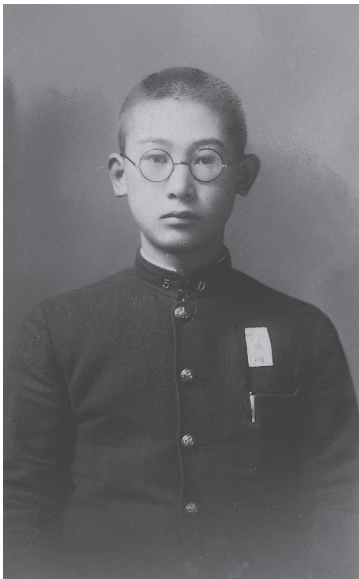
故小池君



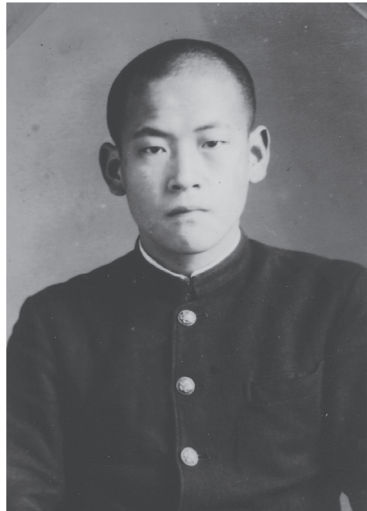
故海老原君 森藤君 金子君
故本村君



上履

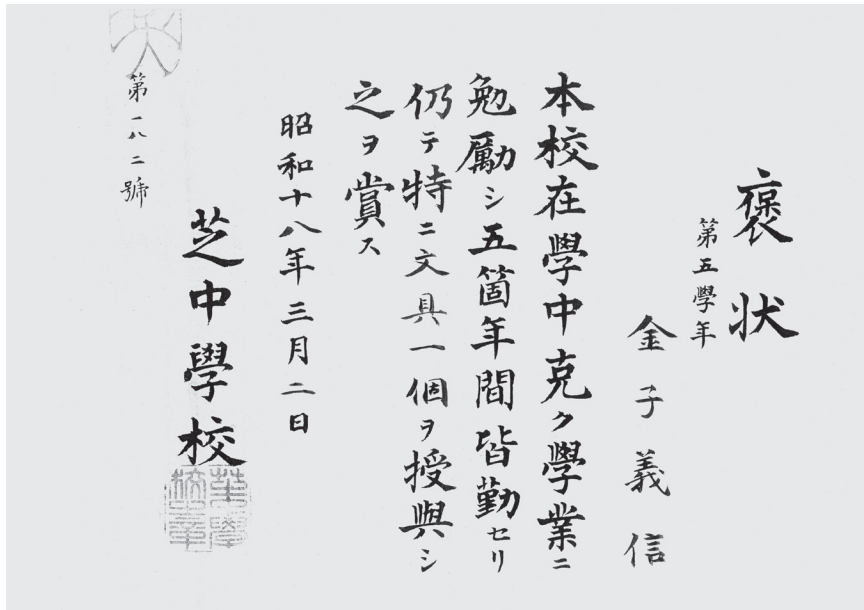


故原田君（昭和 17 年）



故長井君

「褒状」



三七回卒業生で無遅刻無欠席で五年間通学皆勤賞を受けた唯一の青年金子義信君万才！



芝中学正門
敬礼して門に入る



金子君 芝中五年生
妹さんの第六高女入学式に
送って行く時

1	橋本 忠生君	左足膝関節炎で歩行困難	0467-82-5780
2	研野 和人君	静か臓に本調で入院したが何か元気らしい	0463-84-7116
3	堀田 良三君	心臓不調の協力でリハビリ中	3401-6770
4	田村 純君	奥さん何と元気でいるみたい 頑張っほしい	3751-2272
5	宮本 清司君	何とか元気でいるみたい 頑張っほしい	3696-0091
6	中村 信夫君	入院の繰返しが来るとか 元気がだしてくれ	3325-0324
7	窪田 忠善君	腰部部分と神経痛で大分苦しいみたい	3774-3902
8	水野 正洋君	元気がそうに見えるが通院が多くガタが来	045-771-6823
9	瀧渕 清實君	ゼン息か 三七芝会には出席する由	3442-4404
10	石川 浩君	数年前胃がん手術 食事制限 而し気力充分みたい	
11	光澤 富雄君	平々凡凡の人生を送っている由 諸兄に感謝する	046-871-8735
12	高梨 頼幸君	腰痛歩行困難との事 而しTELの声は	045-842-1864
13	福永 公平君	奥さんからの報告によれば入院リハビリ	6765-0001
14	大海 朗君	介護保健施設入院中との事	3708-1378
15	高木 秀夫君	毎朝夕ワンチャンの散歩で多忙 元気が	045-881-0255
16	小久保 和夫君	糖尿その他で歩行困難で外出が駄目みたい	048-769-2374
17	奥野 彰一君	元気らしい 三七芝会に乞出席	045-893-1282
18	宮本 清司君	年金生活苦しいが頑張ってる	3690-0091
19	岡田 喜秋君	“人生は旅である”と云う紀行作家 相変らず元気の様子	042-421-8580
20	森藤 静夫君	芝中時代の友人達の寫眞有難う感謝して	0827-21-0343
21	金子 義信君	最愛の奥さん亡くなって19年独身で今日迄頑張っ来た 疲れた	047-344-2474
22	山口 敦二君	あと1ヶ月終戦が遅れたらあの世に行っ	046-251-8405
23	前沢 宮内君	悠々自適残りの人生を楽しんでる様子	047-438-9208
24	平林 眞君	貴重難う芝中時代の寫眞多数送っくれて	048-856-4018
25	土屋 有梅君	表紙の豪筆感謝 自然態で精進されてる	042-478-3490
26	中島 直忠君	世界旅行が好き 奇人 三七芝会挨拶文有難う 益々健康留意長	049-293-3392
27	丸山 充夫君	生きして下さい 最近奥様が亡くなられた由早く元気になっ	0467-23-7375
28	望月 哲也君	てもらいたい 午前中の診療を引受けてる由無理をしな	3442-3387
29	植村左千夫君 (前 松本)	いっほしい 東京離れて50年芝中時代の青春時代忘	075-841-4644
30	末次 誠君	れない 京都に在住元気です 寫眞が趣味 昔は酒豪と云われたが今は	3713-1293
31	川合 又二君	嗜む位 三七芝会幹事役で活躍 三七芝会 念寫眞は皆誠君のです	3403-5709
32	島田 修君	有名な六本木ヒルズの住人 三七芝会幹 事として大切な人 現在闘病中なるも元	
33	佐藤 寛君	気を保つ 永年小学校の校長として活躍し児童に感 動を与える詞を多々作成 現役で内科小児科医院で活動中、頼もし	044-766-2602

三七芝会協力諸兄紹介

(1) 三七芝会の発足以来何かと協力して下さった諸兄 事務局から
(略君) 順不同

小林義栄、矢吹輝夫、海老原敏明、池谷一、末次誠、瀧本秀明、伊東住職、平出光、
中島直忠、川合又二、前沢宮内、鈴木博視、山本茂男、本村鉄郎、土屋有梅、柴田博彦、
原田経國、長野達、永嶋泰治、島田修、金子義信、山口敦二、堀内昇の諸兄

その他に会の進行に何かと協力下された多数の諸兄が居られました

有難う 感謝してます 元気な方は会のため今后共 力になって下さい

三七芝会事務局

幹事 前沢宮内、山口敦二、川合又二、
末次誠、中島直忠、堀内昇

(2) 三七芝“思い出綴り”に貴重な資料を送ってくれた諸兄

森藤静夫、荒井謙治、前沢宮内、平林眞、金子義信、川合又二、島田修、桑原慎二郎、
石井宏、鈴木博視、末次誠、山口敦二、高梨頼幸の諸兄

(3) 平成21～23年にかけて三七芝会の役員として活動して戴いた亡くなっ
た諸兄

- 1 瀧本 秀明君 矢吹輝夫会長以来世話になった 肺気腫 平成23年2月
で眠るが如く大往生をされた
- 2 永嶋 泰治君 芝学園同窓会理事として又三七芝幹事と 平成23年4月
して活動されたが突然倒れた さいたま
から東京に引越しされたのに残念
- 3 柴田 博彦君 亡くなる10日前事務局で幹事会に出席 平成22年5月
一杯飲んだのに突然奥さんからの知らせ
でわかった
- 4 原田 経國君 物事率直に進言出来る医師反面病気に対 平成21年7月
する相談親切に指導 遊びも大好き麻雀
競馬食べ歩き旅行温泉何でもOK 芝同
窓会理事、三七芝会幹事
- 5 本村 鉄郎君 土屋有梅君の弟子入り書道にまい進 “般 平成21年3月
若心経”写筆中に倒れる 三七芝会幹事

平成 20 年迄の物故者名

会 沢 一 男	青 木 慶 蔵	秋 本 公 正	荒 井 康 治	飯 森 司 要
池 田 光 也	池 谷 一	石 川 裕 志	伊 藤 正 愛	伊 東 康 雄
伊 藤 之 世	井 上 雅 貴	井 上 美 彦	伊 部 健 次	岩 崎 光 三
岩 瀬 千 秋	上 杉 清	内 田 駿 一 郎	上 保 松 雄	海 野 高 幸
海老原 敏 明	遠 藤 正 信	大 畠 武 夫	大 場 清 一	岡 田 年 弘
小 川 哲	大 河 平 行 雄	小 沢 禎 一	片 岡 忠 夫	加 藤 哲 朗
金 子 丈 夫	金 子 悌 二	狩 谷 登	菊 池 進	木 口 正
北 沢 太 郎	木 舟 隆 一	久 保 山 隆 雄	倉 橋 純 一	小 池 匡 三
小 林 茂 夫	小 林 義 栄	小 山 保 太 朗	近 藤 富 夫	斉 藤 輝 夫
作 佐 部 弘	迫 田 泰 正 (旧名 利之)	佐 々 木 敬 一 郎	佐 藤 光 兆 (旧名 照)	塩 沢 道 尾
設 楽 茂 雄	篠 原 靖	柴 田 頼 滋	柴 原 茂 登 一	清 水 四 郎
下 山 端 吾	白 木 弘 文	清 政 文	杉 崎 一 雄	鈴 木 代 三
鈴 木 直 也	須 藤 俊 夫	関 口 保 太 郎	仙 石 荘 三	多 比 良 重 典
高 橋 信 造	高 山 光 弘	竹 葉 秀 世	谷 俊 治	谷 本 二 郎
中 川 信 良	中 島 孝 昭	中 西 雄 朗	中 野 陽	中 村 幹 夫
中 村 礼 次 郎	永 田 重 雄	長 野 達	南 雲 猛	長 谷 川 勢
初 川 次 郎	浜 田 德 夫	樋 口 嘉 彦	平 井 定 四 郎	広 吉 崇
福 島 靖	松 井 永 一	松 井 茂	松 濤 安 定 (旧姓 今井)	村 上 知 己
森 田 茂 彦	八 代 浩	矢 吹 輝 夫	矢 部 行 一	山 内 正 信
山 崎 三 郎	山 室 茂 夫	吉 田 喜 太 郎	米 沢 泰 三	渡 辺 照 三

平成 20 年以降の物故者名

旗 本 信 一	井 田 秀 男	斉 藤 峯 雄	時 田 豊	佐 田 収
酒 井 章 三	長 内 正 雄	天 野 力	永 嶋 泰 治	高 橋 務
山 本 茂 男	菊 地 公 明	小 林 健 一	長 井 宏 造	原 田 経 國
柴 田 博 彦	本 村 鉄 郎	長 司 達 三	田 中 博 孝	奥 野 彰 一
瀧 本 秀 明				

謹んでご冥福をお祈り申し上げます

合掌



故 海老原敏明君

実家が日本橋の印刷屋で、明るい話のうまい人気者でした。 合掌



故 柴田博彦君

三七芝会の殆んどの会に出席され、写真を撮り乍ら、静かにお酒を楽しんでいる姿が目には浮かびます。

有楽町ビルで有名な眼科医として活躍されていました。

突然の訃報に驚きました。ご冥福を祈る。合掌

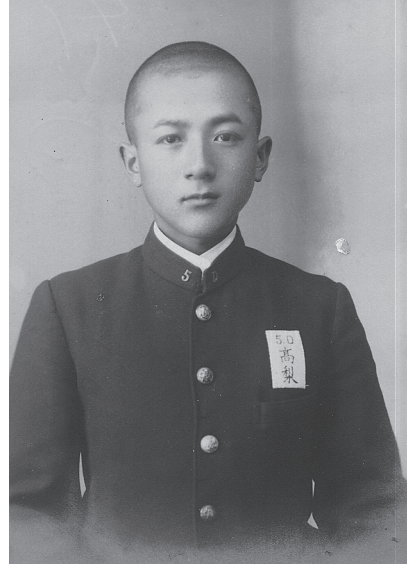


故 瀧本秀明君

三七芝会幹事として活躍され、事務局に毎年「ビール」を送ってくれた。平成23年2月急逝された。



佐藤 寛君
(佐藤内科小児科医院)



高梨頼幸君
(5年生)

昭和 23 年同期会 (11 月 28 日)



1948 11 28 同期会



色々と三七芝会が御世話になっている太田さんです。
これからも何卒よろしく御願い致します。感謝感謝です。



末次 誠君 撮影

三七芝会の会員も、^{ヨワイ}八十路半ばを越え、体力の限界を感じ乍ら、年一回の会合を重ね、ここで「思い出綴り」を遺すべきと「芝の思い出」を発刊することとなりました。懐かしい数多の写真と共に、七十年の人生を語る数々の投稿が寄せられ、各々の思いの中に、多彩の業、詩あり絵ありと飾って頂き、本年11月の会合の当日に発行することが出来ました。

諸兄のご協力に、心より御礼を申し上げます。

思い起こせば、昭和13年の春、戦事色のキナ臭さを感じ始める頃、芝、三縁山内縁の中に、芝中に集った私達は、昔乍らの紺色の制服に身を包み、規則正しく、正門の講堂の徽章に挙手の礼、「遵法自治」の校訓の許、質実剛健の校風を胸に刻み、揃いぶみとなりました。

そして、昭和16年12月8日、大東亜戦争の勃発に胸躍らせたのも束の間、戦時下の厳しい刻を迎え、なんとなく戦いに疑問を感じ乍ら卒業を迎え、軍人を志す者数多く、必死の戦いの中、日本最後の徴兵検査を受け、戦列に参加、計らずも8月15日の終戦を迎えました。

私達は、旧世代の終り、小学校は「ハナ、ハト、マメマス」教育勅語、修身の世代、戦中戦後の厳しい苦しい時代を必死に生き抜きました。

そして、今日、間もなく米寿を迎える年齢となりました。今振り返れば、良き昭和の時代を丸々生きて、厳しい中に、得難き貴重な体験を持ちました。

振り返って、芝中時代は、「遵法自治」の校訓が、強制されることもなく、自然に湧き出ずるソフトな環境にあったこと、各々の人格を尊重するリベラルな雰囲気醸し出されていたこと、あの時代に素晴らしい教育だったと、今更の様に思い出されま

す。人間の最も精神的な要素が形成される、中学時代を、芝中に過すことが出来たことを、大変有難く、受けとめ、感謝そのものであります。

現在日本の、政治の不毛、そして次々起る天災地変、人類の破滅が予感される程の今、昭和の激動を丸々生き抜いた私達が、未だ未だと叫び続けることが必要ではないかと痛感するところです。

人生生き許りが幸せではないが、生かされた生命を大事に、素晴らしき歴史を秘めたこの日本を護り抜く思いを心に刻み、残り少ないであろう人生を芝中の友と共に、語り合いたいと念ずるものであります。

諸兄のご多幸を祈る。

「三七芝の 思いを綴り 今思う 昭和の歴史 丸々吾が身」

(山口記)

芝の思い出

発行日	平成23年11月12日
発行者	三七芝会
編集者	鈴木博視、山口敦二
印刷所	富士印刷株式会社